

ラップ療法の導入から定着までの経緯とその有用性

五十嵐 敦子¹⁾ 滝原 典子¹⁾ 美原 恵里²⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 看護介護部

2) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 施設長

[はじめに]ラップ療法とは食品用ラップなどのプラスチックフィルムで傷を包むウエットドレッシング療法である¹⁾。当施設では平成 24 年に看護師が研修を受けてラップ療法を取り入れたが、処置方法が統一されず定着しなかった。しかし、施設全体で研修を受けたことをきっかけにラップ療法が定着し、一定の効果を得ることができた。そこで今回、ラップ療法の導入から定着までの経緯とその有用性について報告する。

[施設の概要]当施設は、入所定員は 100 人(一般棟 54 人、認知症専門棟 36 人、ユニット棟 10 人)、超強化型老健の要件を満たし在宅生活支援に積極的に取り組み、リピート利用によって利用者の生活を支えている。利用者の平均年齢 85.7 歳、平均要介護度 3.3 である。

[感染防止部会の紹介]当施設では業務改善・ケアの質の向上を組織横断的に実践するため 11 の部会を設置している。感染防止部会は感染症に対する予防と対応方法の検討のみならず褥創管理も兼ねており、褥創予防と治療に関する検討を行い、質の高い褥創ケアを目指して活動している。

[定着するまでの経緯]ラップ療法が定着できなかったのは、スタッフのラップ療法に対する知識不足や手技マニュアルが不完全であったため処置方法が統一されていなかったことが原因と考えられた。そこで平成 27 年 11 月、施設長のアドバイスにより、ラップ療法の第一人者である鳥谷部俊一先生の研修会に医師と複数の看護師が参加した。さらに、実際に講師を施設に招き、治療方法を見学し指導を受けた。研修に参加できなかった看護師には伝達講習を行い、知識を共有した。また「これでわかった！褥瘡のラップ療法」¹⁾を当施設の基本マニュアルとして制定、同講師の手技 DVD を視聴することを必須とし、ラップ療法に対するスタッフの理解の標準化を図った。平成 28 年 1 月から改めてラップ療法をスタートさせた。この取組みについては、当財団の臨床倫理委員会の承認を受け実施した。

[対象・方法]平成 28 年 1 月～平成 30 年 12 月の期間、褥創に対してラップ療法を実施した利用者を実施群、平成 25 年 1 月～平成 27 年 12 月の期間、褥創に対して従来の

処置をした利用者を非実施群とした。褥創の治療開始時における褥創のグレード別に完治するまでの期間を比較した。なお、グレードⅠおよび期間中の死亡者は除外とした。また、両群の褥創処置に要した一人あたりの医薬品費用を比較した。

[結果]実施群は延べ数 21 人、要介護度 3.8 ± 1.5 、年齢 80.7 ± 9.5 歳、男女比 2:1、非実施群は延べ数 18 人、要介護度 4.1 ± 1.3 、年齢 83.3 ± 11.4 歳、男女比 5:4 であった。グレードⅡの治癒までの期間は、実施群 38.9 ± 36.8 日、非実施群 35.3 ± 20.2 日で両群間に有意な差はなかった。グレードⅢの治癒までの期間は、実施群 37.3 ± 29.5 日、非実施群 92.2 ± 42.3 日で実施群は有意に短かった ($p=0.05$)。グレードⅣは両群ともいなかった。医薬品費用は、実施群 $1,237 \pm 1,659$ 円、非実施群 $2,232 \pm 3,600$ 円であった。

[考察]褥創治療に対するラップ療法は、従来の治療方法と比較し治癒までの期間を短縮、医薬品費用を削減させ、その有用性が示唆された。ラップ療法を成功させるためには正しい知識と技術をスタッフ間で共有することが重要と思われた。

[まとめ]当施設は褥創治療にラップ療法を取り入れた。組織でラップ療法を学び処置方法を標準化することは、ラップ療法の定着に繋がる。施設におけるラップ療法は、正しい知識と技術があれば安全・安価な褥創処置方法として有用である。

[引用・参考文献]

1) 鳥谷部俊一：これでわかった！褥創のラップ療法—部位別処置事例集 12.20.2007